

## 大規模災害における歯科的対応を再考する

服部佳功

### Response Actions of Dentists to Large-scale Disasters, Revisited

Yoshinori Hattori, DDS, PhD

巨大地震が津波とともに東北地方太平洋沿岸を襲って4年が経過した。被災地では、被災者の生活再建を促すべく、安定雇用や恒久的住居の確保に向けた施策が次々打ち出されている。しかし、家族を奪われ家を流された人々の悲しみが癒えるには、なお多くの時間を要するであろう。地震国に生きるわが国民は不幸な経験のたびに備えを堅くしてきたが、想定を超える震災に臨んで不幸は繰り返された。今震災でも津波は海岸を遡上して防潮堤を凌駕し、防災技術の粋を集めた発電所を浸して炉心を溶融させた。いまなすべきは、この厳しい経験から再び学び、より安全な明日を築く努力である。

歯科口腔保健・医療の分野でも、震災対策は進んでいた。阪神・淡路大震災を機に誤嚥性肺炎による震災関連死予防の必要が強調され、今震災で被災地への歯ブラシの供給は迅速をきわめた。被災地の歯科医師会は、自治体と結んだ歯科医療救護協定に基づいて多くの歯科医師・歯科衛生士を派遣した。しかし、応急処

置とトリアージ主体の救護活動は被災者のニーズを満たさず、とりわけ慢性期以降も歯科診療所が再稼働しない地域では、移動困難な高齢者から通常の歯科医療を求める声が高まった。震災時の食といえば急性期の非常食に関心が集中しがちだが、食べる機能や疾病と調和した食事の提供には、慢性期にも不備とすべきところが多かった。個人識別に歯科は顕著な貢献をなしたが、データ収集・記載方法の不統一が現場に混乱を招くことも事実としてはあった。

震災の直接的被害がもっとも著しかった宮城県で、歯科医療者はいかに活動したのか。歯科医療救護班を率いて被災地支援に貢献された坪井明人氏、自らの診療所も被災しながら地域の歯科医療の再建に尽力された小野寺 勉氏、解剖学徒でありながら長期にわたる歯科的身元確認作業に身を投じられた鈴木敏彦氏の3氏の語る現場の証言に、耳を傾けて頂ければ幸いである。